

# 八 碑刻資料

小川 快之

## 総説

碑刻資料とは、石碑に刻まれた文（碑記、碑文という）や絵図のことである。地域史レベル、地域住民の社会生活に関わる史料は、清代においても多いとはいえないため、同時代史料でもある碑刻資料は貴重な史料であるといえる。石碑は、橋などの公共施設、寺院や書院などが建てられた時、また、墓がつくられた時に立てられた。そのほか、地域社会で起きたさまざまな社会問題に対して官僚が告示や禁令などを出した際にも、その内容を地域の住民に広く知らしめるために立てられることも多い。碑記は、法制史・社会生活史を研究するうえで貴重な史料となっている。

碑刻資料の内容を確認する場合は、現物で確認する以外に、写真、拓本（石碑に紙をあてて写し取ったもの）、録文（碑記を書き写したもの）を使うことになる。具体的な利用方法としては、金石志（碑記等の録文を集めた書物）や地方志、及び碑刻集（拓本や録文を掲載した書物）で内容を読むことができる。なお、地方志などの文献史料で確認できるだけで、現物の存在が確認できないものも多い。

書籍としては、特に、『石刻史料新編』一～四（台北、新文豐出版公司、一九七七～二〇〇六年）が、宋代から清代も含め、金石志や地方志など関連書から網羅的に碑刻資料を収集編纂しており、史料を採す際には、まず確認すべきもの

といえる。また、胡海帆・湯燕編著『中国古代碑刻銘文集』（北京、文物出版社、二〇〇八年）もある。さらに、中国図書館善本金石組編『歷代石刻史料彙編』（北京、北京図書館出版社、二〇〇〇年）には、第三編兩宋、第四編遼金元、第五編明清に、清代までの資料が収録されていて有用である。

また、宋代から清代に関する碑刻集としては、たとえば以下のものがある。中国国家図書館善本金石組編『宋代石刻文獻全編』（北京、北京図書館出版社、二〇〇三年）、李華編『明清以来北京工商會館碑刻選編』（北京、文物出版社、一九八〇年）、蘇州歴史博物館ほか編『明清蘇州工商業碑刻集』（南京、江蘇人民出版社、一九八一年）、上海博物館図書資料室編『上海碑刻資料選輯』（上海、上海人民出版社、一九八〇年）、王国平・唐力行編『明清以来蘇州社会史碑刻集』（蘇州、蘇州大学出版社、一九九八年）、江蘇省博物館編『江蘇省明清以来碑刻資料選集』（北京、生活・読書・新知三聯書店、一九五九年）。これらの碑刻集の録文については、文字が間違っている場合もあるので、読解する場合には、現物や写真版と照合したり、複数の録文を対照するなど注意が必要である。なお、碑刻資料について解説したものとして、『石で読む中国史』（『月刊しにか』一二巻三号、大修館書店、二〇〇一年）や須江隆編『碑と地方志のアーカイブスを探る』（汲古書院、二〇一二年）などがあり、資料を扱ううえでの予備知識を得るのに有用である。

以下では、法制史と関連する碑刻資料のなかから、告示碑記と墓誌銘、そして会館碑記について、具体的な史料を取り上げて読解を行いながら、その内容について解説していきたい。

## 一 告示碑記

### 【解題】

官僚が告示や禁令を出した時にその内容の周知徹底を図って石碑を立てることがあった。こうした石碑は、周知徹

底するために同じ内容のものが複数立てられることもあり、現存する石碑のなかでもそうした事例が確認できる。その内容は、残存する石碑で確認する以外に、総説で列挙した碑刻集などの出版物で確認することができるものもある。

【史料Ⅰ】 書影 15

元和県為猪行公置猪客留宿所永禁地棍借端滋擾碑

① 原文

補用同知直隸州特授江南蘇州府元和縣正堂陽、爲給示諭禁事。

據職員朱同春、陶公興、周鴻泰、陸源昌、葉公振等稟稱、均在齊門內新橋下塘亭四圍、領帖開張猪行、買賣公平。每逢猪客到行銷售、均須住宿職等行內、脫貨方歸。屋窄客多、無從設榻、更替而睡。或因住宿無處、遂致貨售他行、因此生意清淡。現擬、職等五行附近、公置成亦如房屋一所、專爲買賣猪客暫宿之處、另業不留。現在各客將屆畢集、恐有該處地棍藉端滋擾、稟求示禁等情。據此。除批示外、合行給示諭禁。爲此示仰該行夥地保人等知悉。自示之後、如有地棍頑藉端滋擾、以及惡丐強討硬化情事、許即指名扭解本縣、以憑提案究處。該地保如敢隱庇、定提并究。其各凜遵、毋違。特示遵。

同治拾參年肆月初五日示。發猪業公所立。

② 訓読

補用同知直隸州特授江南蘇州府元和縣正堂陽、示諭を給して禁する爲の事。

職員の朱同春、陶公興、周鴻泰、陸源昌、葉公振等の稟に據りて稱すらく、均な齊門内の新橋下塘の亭四圍に在り、帖を領して猪行を開張して、買賣は公平たり。猪客行に到りて銷售するに逢ふ毎に、均な須く職等の行内に住宿すべくして、貨を脱して方めて歸る。屋は窄く客は多く、榻を設くるによるなく、更替して睡る。或いは住宿に處無きに

因り、遂に他行に貨售するを致し、此れに因りて生意清淡たり。現擬するに、職等の五行の附近に、成亦如の房屋の一所を公置し、専ら買賣せる猪客の暫く宿るの處と爲し、另業は留めず。現在各客の將に畢集に届らんとするに、該處の地棍の藉端して滋擾する有るを恐れ、示禁を稟求す、等の情有り、と。此れ據けたり。批示するを除くの外、合行に給示して諭禁すべし。此れが爲に該の行夥・地保人等に示仰して知悉せしむ。示して自りの後、如し地棍の藉端して滋擾し、以て惡巧の強討して硬化するに及ぶの情事有らば、即ちに指名して本縣に扭解するを許し、以て案に提し究處するに憑す。該の地保如し敢へて隱庇せば、定ず提し、并せて究す。其の各々凜遵し、違ふこと母かれ。特に示して遵はしむ。

同治拾參年肆月初五日に示す。猪業公所に發はして立つ。

### ③ 語 釈

〈縣正堂〉知県（県知事）。〈示諭〉告示。〈職員〉公務や業務に従事する人。〈領帖〉營業許可を取る。〈猪行〉豚肉の仲買商。〈猪客〉豚肉業者。〈銷售〉売る。〈職等〉本職。下級官員が上級官員に対して使う自称。〈現擬〉本案。〈畢集〉集合する。〈地棍〉地元のごろつき。〈滋擾〉騷擾を起こす。〈示禁〉禁令を公布する。〈等情〉上行文の引用がここで終了したことを示す慣用句。〈行夥〉店員。〈地保〉地方末端の行政責任者。〈知悉〉知らしめる。〈藉端〉いいがかりをつける。〈惡巧〉悪辣な乞食。〈強討〉無理やりせびりとる。〈情事〉事情。〈扭解〉拘引する。〈提案〉記録を引き出す。〈究處〉取り調べて処分する。〈提究〉追究する。〈凜遵〉いささかたりとも揺るがせにせず実行せよ。

### ④ 和 訳

補用同知直隸州特授江南蘇州府元和県の陽が、告示を出して禁じた件。

職員朱同春、陶公興、周鴻泰、陸源昌、葉公振等の上申書にはこうある。「私どもは齊門内の新橋下塘の亭四図で、

営業許可を取って、猪行を開業しておりまして、その売買は公平にしております。猪客が店に来て売買を行う時には、皆必ず本職の店内に宿泊し、豚を売って初めて帰ることになっております。しかし建物が狭く客は多く、寝床が設けられないので、交替しながら睡眠をとっています。あるいは宿泊する場所がないので、豚を他の猪行に運んで売るのがおり、商売が振るわなくなっております。今、本職の五つの猪行の付近に、皆で成亦如（人名か？）の家を一軒購入して、もっぱら猪客がしばらく宿泊する場所とし、他の仕事の者は宿泊しないようにしたいと思います。現在猪客が集まってくることに、この地元のごろつきがそれにかこつけて悪さすることを心配しておりますので、告示を出して論じて禁止してください」と。

この陳情を受けたので、指示を出すことに加えて、告示によって禁止を論さねばならない。このために、当該の店員や地保などに申しつけて知らしめる。告示が出た後に、もし地元のごろつきがいいがかりをつけてごたごたを起こし、悪辣な乞食がゆすりたかりをしたならば、ただちに指名手配して県に拘引することを許可し、記録を引き出して処罰のよりどころとする。当該の地保がもしあえてこれをかばい立てたならば必ず併せて追究する。いささかなりとも揺るがせにせず実行し、違反することのないようにせよ。特に申しつける。

同治一三年（一八七四）四月五日に發布した。猪業公所に送って立てる。

### 【解説】

この告示碑は、清代の蘇州府元和県の陽知県が豚肉問屋で発生した問題を解決するために出した告示の内容を、周知徹底させるために、猪業公所（豚肉業者の会所）に立てられたものである。録文は、前掲『明清蘇州工商業碑刻集』（二五四頁）で確認できる。肉と言えば豚肉（猪肉）を指すほど、中国では豚肉が伝統的に食べられてきた。

猪行とは生きた豚を売買する問屋のことで、そこに猪客と言われる売買する業者が定期的に集まっていた。彼らは

問屋に寝泊まりしていたが、蘇州府元和県では、場所が足りず、そのため、猪客を収容できず、それに乗じて地元のごろつきが暗躍する事態が発生していた。このため、関係者の上申に従い、猪客の宿泊する施設を皆で設け、ごたごたが起きないようにしたようである。

### 【書式】

告示碑記の書式は、一般的には、冒頭に告示を出した地方官の肩書きと姓が記され（名は通常書かれない）、その告示の題目が書かれている。上部に「告示」と書かれている場合もあるがないものも多く、この碑記には記載はない。「爲し事」の文言は、公文書の冒頭でその題目を記す書式である。

本文では、経緯を示すために、猪業公所の「職員」の上申書の内容が引用され、それに続いて、陽知県の告示の内容が記されている。「合行給示諭禁。爲此示仰々等知悉。」との文言は、地方官の告示にしばしばみられる定型句である。通常は、文章の最後に立てられた日付が記される。さらに碑を立てた機関や人物の名前が記されることもある。この碑記でも、日付と猪業公所に立てられたことが書かれている。

### 【参考文献】

范金民（岩井茂樹訳）「清代蘇州都市文化繁栄の実写——『姑蘇繁華図』——」（『都市文化研究』二号、二〇〇三年）

王日根「清代江南地方官府对商業秩序的整治——以碑刻資料为中心的考察——」（『厦門大学学報』〔哲学社会科学版〕二〇〇七年二期）

孫斌「清代工商業行会規約之体系探析——以蘇州地区碑刻史料為視角——」（『蘇州教育学院學報』三〇卷五号、二〇一三年）

## 【史料Ⅱ】

嚴禁錮婢不嫁告示碑

## ① 原文

告示。欽加同知銜、署理臺南府安平縣正堂、記大功四次、加十級、紀錄十次范、爲出示嚴禁事。光緒十五年五月二十一日、據美蓉郊董事職員張大琛等稟稱。竊琛等前稟販運婦女等情、蒙批、如稟轉詳、通飭嚴禁。惟此奸徒怙惡不悛、而近日奸風尤熾。形同化外。琛等目覩心酸。是以仰懇迅先示禁、以便購線密拿懲辦。庶無依女子免流離失所之苦、而奸徒知法隨令行之警。再郡城有等紳富、買用婢女。甚至念歲以上、仍使其市肆往來、閭外無分。遇輕浮之徒、當衆戲調。稍爲面熟、卽有貪利六婆勾引成姦。所謂姦盡則出殺由。禍害更甚。琛等以風化攸關、可否請以示禁。有婢之家、凡使女至念歲以上者、如本有婿、或無婿而有娘家可主者、該家主收回原交身價退回字據、將該女交其父母領回婚配、不得久留使用。似此可無怨女之憂、藉培家主之德。販運奸徒亦可奸無從入手、引誘之輩又可絕勾姦之術。琛等心存義舉、仁憲自有權衡。是否有當。不揣冒瀆、陳情再叩、仰祈俯賜轉詳、通飭勒石嚴禁等情、到縣。據此卷查、先據該董事張大琛具稟、奸徒販賣人口一案、業經詳蒙道憲批飭各屬一體示禁、在案。茲據前情。本縣查、錮婢不嫁、最爲惡俗。該職員所稟、係爲杜絕姦拐整頓風化起見、似可俯如所請。除詳請道憲通飭一體示禁外、合行出示嚴禁、爲此示仰閭閻邑紳商軍民諸色人等知悉。自示之後、如有年大婢女、趕緊卽行婚配、不得仍蹈故轍。倘敢錮婢不嫁、一經察出、無論何項人等、定卽從嚴懲辦、決不姑寬。各宜自愛、毋違。特示。

光緒十五年六月缺日給立石。

## ② 訓讀

告示。欽加同知銜、署理臺南府安平縣正堂、記大功四次、加十級、紀錄十次の范〔克承〕が出示して嚴禁する爲の

事。光緒十五年五月二十一日、芙蓉郊の董事職員の張大琛等の稟に據りて稱す。竊かにおもふに琛等の前稟の婦女を販運せる等の情は、批を蒙り、稟の如く轉詳して、通飭して嚴禁す、と。惟だ此の奸徒は惡を怙みて悛めず、而して近日奸風尤も熾なり。形は化外に同じ。琛等は目覩して心は酸なり。是れを以て迅く先ず示禁して、以て線を購ひて密拿懲辦に便にすることを仰懇す。依る無き女子が流離して所を失ふの苦を免れ、而して奸徒に法隨令行の警を知らしめんことを庶ふ。再び郡城の有等の紳富は、婢女を買用す。甚しきに至りては念歲以上にして、仍ほ其の市肆に往來せしめ、閭外の分なし。輕浮の徒に遇へば、當衆戲調す。稍や面熟を爲せば、即ち貪利の六婆が勾引して姦を成すこと有り。所謂姦盡くれば則ち殺由を出づ。禍害は更に甚し。琛等風化に關する攸を以てするに、以て示禁を請ふ可きや否や。婢有るの家、凡そ使女の念歲以上に至る者は、如し本婿有るか、或いは婿無きも娘家に主となるべき者有らば、該家の主が、原交の身價を收回して字據を退回し、該女を將て其の父母に交して領回し婚配せしめ、久しく留めて使用するを得ず。此くの似くんば怨女の憂無く、家主の徳を藉培すべし。販運せる奸徒も亦た奸するも入手に従ふ無かるべく、引誘の輩も又た勾姦の術を絶つべし。琛等の心は義舉に存す。仁憲は自ら權衡有り。當に有りや是否や。冒瀆を揣らず、陳情し再叩し、仰祈し俯して轉詳を賜はり、通飭して石に勒して嚴禁せん、等の情、縣に到る。此の卷に據りて査するに、先づ該の董事の張大琛の具稟するに據れば、奸徒の人口を販賣せる一案は、業經に詳して道憲の批飭を蒙り各屬は一體に示禁すること、案に在り。茲に前情を據く。本縣が査するに、婢を錮して嫁さざるは、最も惡俗爲り。該の職員の稟する所は、姦拐を杜絶し風化を整頓するが爲めに起見するに係り、俯して請ふ所の如くすべきに似たり。道憲に一體に示禁を通飭するを詳請するを除くの外、合に出示して嚴禁を行ふべく、此れが爲に閭邑の紳商軍民諸色人等に示仰して知悉せしむ。示してよりの後、如し年大の婢女有らば、趕緊に即ち婚配を行ひ、仍ほ故轍を蹈むを得ず。倘し敢へて婢を錮して嫁せず、一たび察出を経ば、何項人等を論するなく、定す即ち嚴に従りて懲辦し、決して姑寬せず。各々宜しく自愛すべし、違ふこと母れ。特に示す。



光緒十五年六月缺日給して立石す。

### ③ 語 釈

〈出示〉出示曉諭の略。官庁が出す命令。〈芙蓉郊〉郊とは清代の台湾で見られた貿易商の同業集団である「郊商」のことで、芙蓉郊とはアヘン商人の集団のこと。〈董事職員〉公務や業務に従事する人のまとめ役。幹事。〈蒙批〉請願したことについて指示を受けること。〈轉詳〉公文で上級官庁に報告する。〈通飭〉全体に命令する。〈目覩〉目撃する。〈仰懇〉懇願する。〈購線密拿〉「購拿」で「懸賞つきで人を捕らえる」の意。〈懲辦〉処罰する。〈郡城〉府の官庁のある都市。〈六婆〉口入れをする女性。〈攸關〉くにかかわることである。〈字據〉証文。〈怨女〉年をとった未婚の女性。〈仁憲〉地方官の尊称。〈仰祈〉要請する。〈俯賜〉上申書で請求する際に使う言葉。〈具稟〉書類で申請する。〈道憲〉道員（按察使・布政使の属僚で、各地に派遣される官僚）のこと。〈批飭〉指示を与えて命令する。〈起見〉目的とするところ。〈示仰〉告示。

### ④ 和 訳

告示。欽加同知銜、署理台南府安平県正堂、記大功四次、加十級、紀錄十次の范克承が告示を出して嚴禁した件。

光緒一五年（一八八九）五月二二日の芙蓉郊の董事職員の張大琛等の陳情書にはこのように書かれていた。「琛等が以前出した陳情書にある婦女を販売した件については、指示を受け、「それには」『陳情書のように上級官庁に報告し、全体に命令を出して嚴禁する』とございました。しかし、ここのごろつきたちが悪事を改めず、最近悪い氣風がとも盛んになっております。その状態は化外の人と同じです。琛等はこれを目撃して心が辛くなります。そのために迅速に禁令を發布して、懸賞をつけて捕縛して処罰するように懇願致します。親族がいない女子が流浪して居る場所がないという苦痛を免れ、ごろつきたちに「法随令行の警」を知らしめることを希望致します。

さらに府城の一部の郷紳富豪は、婢女を買って使っています。ひどい場合には二〇歳以上になる者も市場に買い物

に行かせて、見境がありません。軽薄な輩にあつてしまうと、公衆の面前で皆でなぶりものにします。少しでも顔見知りになると、利を貪る口入れをする女性が手引きして悪事をなすことがあります。いわゆる「売春は極まれば殺人の原因にもなる」「という有様で」、その弊害はさらに甚だしくなっております。琛等が教化に関わることを理由に、取り締まることを請願するのはためでしょうか。

婢女を持つ家で、およそ下女で二〇歳以上になっている者は、もしもともと結婚相手がいるか、あるいはいなくても実家に主婚者（婚姻を取り仕切る者）がいたならば、その家の主人がもとの売値で取り戻し証文を買い戻し、当該の女子をその父母に引き渡して結婚させ、長く留めて使役してはならないようにする。そうすれば、未婚女性の憂いをなくし、家主の徳を培うことができます。婢女を売買するごろつきたちがまた女子にちよっかいを出せないようにし、誘惑する輩もまた詐欺ができないようにすべきです。琛等の心は義挙にあります。地方官のご判断にかかっています。妥当であるかどうか、失礼を顧みず、陳情し再び上級官庁への報告をお願いします、命令を下してそれを石に刻んで厳禁されるように請願致します」。この陳情書は県に届けられた。

この陳情書によれば、先に当該の董事の張大琛が陳情している、ごろつきたちが人を売買した一件は、すでに道員に報告し、その指示を受けて管轄の地域では全体に禁じており、その処理を終えている。いま陳情書によれば、本県が調べたところ、婢女を拘束して嫁がせないのは、最も悪い習俗である。当該の職員が陳情したところは、誘拐を根絶して、礼節を正すことを目的としたものであり、要請があつたとおりにすべきであろう。道員に禁止命令を出すように要請する外、告示を出して厳禁すべく、そのために、県下の諸々の者たちに告示を出して周知徹底させる。告示を出してから、もし年長の婢女がいたならば、すぐに結婚させ、前の失敗を繰り返してはいけない。もしあえて婢女を拘束して婚姻させない場合は、ひとたび調査して発覚すれば、どういった人であっても、必ずただちに厳罰に処し、決して大目にみない。各人は自愛して、違反してはいけない。特に指示を出す。

光緒一五年六月缺日に「告示を」給して石碑を立てる。

### 【解説】

この告示碑記は、清末の台湾で社会問題となっていた娼婢を取り締まるために書かれたものである。娼婢とは、販はん梢しょうと呼ばれる人身売買業者によって売られるなどして奴婢となった女性が、長期にわたり使役されて、結婚ができないという社会問題のことを言う。雍正十三年（一七三五）に定められた清律の嫁娶違律主婚媒人罪律で、婢女を婚配（結婚）させないことが禁じられ、台湾では、道光年間（一八二一―一八五〇）より禁令が地方官によりたびたび発布されていた（「伊能一九二八」）。この告示は、こうした流れのなかで出されたもので、芙蓉郊（アヘン商人集団）の職員たちが、問題の解決を求めて提出した陳情書に対して、地方官が出した告示である。

この内容を記した石碑は、現在のところ、二つ確認されており、それぞれ台南市の南門路大南門碑林（第三排第一位）と中区赤嵌楼（オランダ人が築城した城塞跡）碑林台基北壁にある。ここでは、赤嵌楼碑林のものを取り上げた。この碑記の内容は、前掲『石刻史料新編』第三輯一七所収『明清台湾碑碣選集（上）』及び、項潔編『国立台湾大学典藏古碑拓本——台湾篇——』（台北、国立台湾大学図書館、二〇〇五年）などで確認できる。

### 【書式】

石碑の上部に大きく「告示」とあり、冒頭には表題として、范知県の肩書きと禁令に関わる内容であることが記されている。それにつづき、芙蓉郊の董事職員の張大琛等が県に提出した陳情書の内容が引用され、さらにその陳情を受けて范知県が下した対処策の内容が記されている。そして、最後に石碑を立てた日付が刻まれている。

## 【参考文献】

伊能嘉矩『台湾文化志』（刀江書院、一九二八年）

岸本美緒「妻を売ってはいけなにか?——明清時代の売妻・典妻慣行——」（『中国史学』八卷、一九九八年）

耿慧玲「禁錮婢女碑与清代台湾婦女地位研究」（『朝陽学報』一三期、二〇〇八年）

岸本美緒「礼教・契約・生存——清代中国の売妻・典妻慣行と道德觀念——」（『歴史学研究』九二五号、二〇一四年）

五味知子「明清時代の錮婢にかかわる社会通念」（『東洋文化研究（学習院大学）』一六号、二〇一四年）

## 二 墓誌銘

### 【解題】

墓誌銘は、死者の姓名・本貫（本籍地）・経歴・功績・家族の状況などを散文で記した誌と、しょうとく頌徳・追慕の思いを韻文で述べた銘からなる。本人について知る者が行状（経歴などをまとめたもの）を書き、著名な文章家などに依頼してそれをもとに墓誌銘を作成してもらうこともよく行われていた。

石以外に銅板などに刻まれることもあり、墓の内部に納めることが多い。墓前に立てた石碑に刻まれる場合もあり、墓表、墓碑などと呼ばれる。墓誌銘には、官僚の治績や家族に関する記述など、他の史料には書かれていない記述も見られるので、法制史・社会史・家族史を研究する際に参照する価値は十分にある。ただ、著名な文章家に仮託した後世の偽刻や後の時代の改ざんもあるため、扱う際には注意が必要である。

墓誌銘は、執筆者の文集がある場合には、そのなかに収録されていることが多い。それ以外に、周阿根編『五代墓誌彙考』（合肥、黄山書社、二〇一一年）、陳柏泉編『江西出土墓誌選編』（南昌、江西教育出版社、一九九一年）などのよう

に出土した墓誌の内容を整理・紹介した書籍からも内容を知ることができる。なお、墓誌資料については、「趙二〇〇三」が参考になる。

### 【史料Ⅲ】

朝散大夫知常德府鮑公墓誌銘

#### ① 原文

A 公字醇父。其先自開封徙越。又徙括、爲龍泉人。曾大考安德、大考貽周俱以行稱于鄉。考謙贈朝議大夫、妣王氏贈宜人。朝議嘗一與計偕、卽不事選舉、退而自修于家。里有訟爭、縣大夫屬以平決。鄉民有過、不畏有司之法、而畏其一言。公少敏悟、刻意經學、踰冠入太學。淳熙辛丑、第進士、調徽州司戶參軍。先是、歲受租吏因緣爲欺多過取、民困甚、相與愬于州。守以委公、遂頓革前弊。

B 再調汀之上杭令。……州有疑獄久不決。臬使辛公棄疾語其屬曰、自入境、惟聞上杭令解事、盍以委諸公。一閱具得其情、囚以不冤橫死。

C 擢知常德府。湖陰俗尙妖祠、用人於淫昏之鬼。蹤跡詭祕不可詰。公閱他訟、見民有橫死者、疑爲祭鬼。卽命審覈、伏其辜、焚祠毀像。由是訖息。

D 公性任真無矯飾、友朋有過、必直辭規切之、是非可否。惟義所在貴勢不能奪。爲公家惜財曰、此吾民膏血。吾不忍妄用。卒之年十月五日墓于福山。在某鄉某里。

#### ② 訓読

A 公字は醇父。其の先は開封より越に徙る。又た括に徙り、龍泉の人となる。曾大考の安德、大考の貽周は俱に行を以て郷に稱せらる。考の謙は朝議大夫を贈られ、妣の王氏は宜人を贈らる。朝議は嘗て一たび計と偕にするも、卽

ち選舉を事とせず、退きて自ら家に修む。里に訟争有らば、縣の大夫屬ぬるに平決を以てす。郷民に過有れば、有司の法を畏れざるも、其の一言を畏る。公少きより敏悟たりて、經學を刻意し、冠を踰ゑて太學に入る。淳熙辛丑、進士に第し、徽州司戸參軍に調せらる。是より先、歲ごとに租吏の因縁して欺多過取を爲すを受け、民困甚しく、相ひ與に州に懇ふ。守以て公に委ぬるに、遂に前弊を頓革す。

B 再び汀の上杭令に調せらる。……州に疑獄の久しく決せざる有り。臬使の辛公棄疾、其の屬に語りて曰く、境に入りてより、惟だ上杭令の事を解するを聞く、盍ぞ以て諸を公に委ねざるか、と。一たび閱して具に其情を得、囚は以て冤横の死たらず。

C 知常德府に擢せらる。湖陰の俗として妖祠を尙び、人を淫昏の鬼に用ふ。蹤跡は詭秘して詰すべからず。公、他の訟を閱して、民の横死せる者有るを見て、祭鬼を爲すを疑ふ。即ち命じて審覈し、其の辜に伏せしめ、祠を焚き像を毀つ。是れ由り訖息す。

D 公性は任眞にして矯飾無く、友朋に過ち有らば、必ず直辭して之を規切し、可否を是非す。惟だ義の在る所、貴勢も奪ふ能はず。公家の爲に財を惜しみて曰く、此れ吾が民の膏血たり。吾れ妄りに用ふるに忍びず、と。卒する年の十月五日に福山に塋る。某郷某里に在り。

### ③ 語 釈

《越》紹興府の別称。《括》処州の別称。《曾大考》亡くなった曾祖父の意。《大考》亡くなった祖父の意。《考》亡くなった父の意。《朝議大夫》文官の寄祿官（俸祿や位を示す官名）の一つ。正六品相当。《宜人》朝奉大夫（従六品相当）以上朝議大夫以下の寄祿官にあった者の母親や夫人に与えられた称号。《興計偕》召し出される。《冠》男子が二〇歳になって行ふ、髪を束ね、冠を着ける成人の儀式。《太學》宋代の最高学府。《司戸參軍》州の財政担当の官僚。《臬使》提点刑獄（宋代の行政区画である路の裁判担当の長官）の別称。《辛公棄疾》辛棄疾。字は幼安、号は稼軒。

提点江西刑獄などを歴任した。詩人としても有名な人物。

#### ④ 和 訳

A 鮑公、字は醇父。祖先は開封府より紹興府に転居した。さらに処州に転居して龍泉県の人となった。曾祖父の安德と祖父の貽周はともにその行いにより郷里の人々から称賛されていた。父の謙は朝議大夫を贈られ、母の王氏は宜人を贈られた。謙は以前に召し出されたことがあったが、科挙受験はしないで、帰ってきて自宅で研鑽していた。郷里で訴訟沙汰があると、知県に頼まれて公平に裁き、郷里の民は過ちがあると官吏の法を畏れるよりも、謙の一言の方を畏れた。公は若い時から聡明で、經学を熱心に学び、二〇歳になると大学に入学した。淳熙八年（一一八二）に進士に合格し、徽州司戸参軍に任用された。「そこでは」以前から毎年徴税担当の役人が不正をして多く税を取ったことにより、民が非常に困窮し、皆で一緒に徽州の役所に告発した。「徽州の」知州（州知事）はその処理を公に頼み、たちどころにこれまでの弊害が是正された。

B さらに汀州の上杭県の県令（県知事）に任用された。……州に疑獄があつて、裁決が長引いていた。提点刑獄の辛公棄疾は部下に、「赴任してから、上杭県の県令がよく物事を解決していると聞いているが、どうして公に委ねないのか」と言った。公は少し状況を見ただけでその実情を把握したので囚人は冤罪で死ぬことを免れた。

C 知常德府（常德府の知事）に拔擢された。洞庭湖の南側の習俗では妖祠を尊んでいて、人をみだらな妖神の祭祀に用いていた。足あとをくらましており、問い詰められなかった。公は他の訴状を見ていて、悲惨な死に方をした民がいたのを知り、妖神を祭ったのではないかと疑いを持った。そこで命じて捜査をさせ罪に服させ、祠を焼き神像を破壊した。これより「そうしたことは」なくなった。

D 公は性格が実直で飾り気がなく、友人に過ちがあると、必ず直言してそれを諫め、良し悪しを述べた。義があるところは権勢がある者も思うようにできなかった。国家のために財を惜しんで、「これは我が民の膏血である。私はみ

だりに使うことはできない」と言っていた。亡くなった年の一〇月五日に福山に葬った。某郷某里にある。

### 【解説】

この墓誌銘は、朱子学者として知られ、南宋の理宗朝（一二二五～一二六四）に参知政事も務めた真徳秀（号は西山先生）が知常德府などを務めた鮑粹然すいぜんのために書いたものである。真徳秀の文集である『真文忠公文集』巻四六に収録されているが、石碑は確認できない。

この墓誌のなかのCに書かれている内容は、宋代に湖南等で問題になっていた「殺人祭鬼」（人を殺して妖神を祭る）という習俗に関するものである。宋代には、政府が認めないさまざまな妖神信仰が民衆のなかに存在しており、政府はそれらを「淫祠」として取り締まっていた。特に「殺人祭鬼」は、凄惨な行為を伴うため、政府がたびたび禁令を出し、地方官による取り締まりも行われていたが、Cの記事もその一つといえる。

### 【書式】

ここでは法制史に関連した部分のみA～Cの順に抽出したが、この墓誌全体の構成は以下のとおりである。冒頭では、墓誌を書くことになった経緯が記されている。その後、先祖に関する記述、官僚になるまでの経緯が書かれ（Aの記事）、続いて、官僚としての履歴や業績が書かれている。その具体的な内容は以下のとおり。徽州（江南東路）の司戸参军（Aの記事など）。上杭県（福建路汀州）の県令（Bの記事など）。建平県（江南東路広徳軍）の知県。万安県（江南西路吉州）の知県。融州（広南西路）の知州。常德府（荊湖北路）の知府（Cの記事）。

そして、弾劾を受けて左遷されて没したことが記されている。その後、夫人や子孫に関する記述があり、人柄を総括した記述と、埋葬に関する記述がつづき、最後に銘がある。なお、埋葬地を「某郷某里」と書いているのは、真



徳秀が書いた原文を文集が掲載したためである。石碑に刻む時には「某」に実際の地名を記入して仕上げられた。

【参考文献】

河原正博「宋代の殺人祭鬼について」『法政史学』一九号、一九六七年

宮崎市定「宋代における殺人祭鬼の習俗について」『中国学誌』七号、一九七三年、のち『宮崎市定全集』一〇、岩波書店、

一九九二年所収）

金井徳幸「宋代荆湖南北路における鬼の信仰について——殺人祭鬼の周辺——」『駒沢大学禅研究所年報』五号、一九九四年）

金井徳幸「宋代における妖神信仰と「喫菜事魔」・「殺人祭鬼」再考」『立正大学東洋史論集』八号、一九九五年）

趙超『古代墓誌通論』（北京、紫禁城出版社、二〇〇三年）

王章偉「妖与霊——宋代邪神信仰初探——」『九州学林』三四輯、二〇一四年）

三 会館碑記

【解題】

会館とは、同業者・同郷出身者の活動拠点・寄り合い所として、各地に設けられた施設のことである。情報交換の場であるとともに、調停なども行われていた。会館には、事務所の他に、集会所、自らの仕事や郷里の守護神の神殿、守護神に奉納する演劇を演じる舞台などが設けられた。関係者たちは、ここで定期的に祭典・集会を行い、ネットワークの結束を高め、さまざまな物事に対処していた。

特に長らく首都が置かれていた北京には多くの会館が設けられ、その様子は仁井田陞氏らの調査報告（佐伯有一ほか編註『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、一九七五年）により知ることができる。会館には、義捐金で建物を修築・増築した時や規約が設けられた時などに石碑が立てられ、その内容から、会館の運営のあり方、会館を中心とする商人たちのネットワークのあり方などを知ることができる。

#### 【史料Ⅳ】

##### 糖餅行雷祖勝会碑

##### ① 原文

蓋聞、爲善之道、莫爲之前、雖美弗彰、莫爲之後、雖善弗傳。是善事之創始、原於前人、而繼美之責成、則在後輩。猶之疏河者、必遵其源、登枝者不忘其本。推厥由來、誠有所自。況京師爲首善之區。名利之藪、百工相聚、千里謀生。孰不沾聖時之雨露、而仰神靈之庇蔭哉。如我江南糖餅行、在京貿易已久。所（有）鋪戶櫃案人等、向於康熙年間、即在沙窩門內道左之馬神廟、捐助銀兩、并置墳地、爲供奉香火之費。內敬祀雷祖大帝、每屆會期、恭詣廟所拈香以昭誠恪、而酬靈貺所。乾隆五十五年、司事大興樓火災、將地契及修蓋殿宇帳目、均被焚化無存。後於嘉慶四年、又續捐香資、置辦供器鑾駕等件、并議有行規章程。按舊立碑碣可考、茲不復叙。迨去年行規紊亂、漸改舊章、遂邀櫃夥人等、通同公議、重立行規、俾使遵守。庶不負前人與善之美、而後之有爲者、抑亦有所徵本求源歟。是爲序。

道光二十一年三月初四日、修理爐灶錢四十四吊四百四十二文。二十二年十月初四日、齊行敬神錢三十七吊四百文。道光二十五年三月二十六日、置地三畝五分、石莊子、立字樣地價共用錢一百四十三吊四百七十文。此地坐落在永定門外西彭家莊。道光二十七年二月十九日、修理群牆南岸共用二百吊文正。

京通南案。祥豐號、惠蘭齋、慶蘭齋、馨蘭齋、通州言廷桂助錢十千、明遠樓、阜豐號、太和號、天桂齋、天□齋、復

盛齋、豐泰號、金蘭齋、寶聲樓、乾泰號、同泰號、瑞興號、成泰號、佩蘭齋、天源號、上珍齋、王其祿、各鋪戶掌案人等助銀三十七吊五百文。

道光二十八年六月二十四日、同立。

## ② 訓 読

蓋し聞くならく、善を爲すの道は、これが前と爲るもの莫くんば、美なりと雖も彰れず。これが後と爲るもの莫くんば、善なりと雖も傳はらず、と。是れ善事の創始は、前人を原ね、而して美を繼ぐの責成は、則ち後輩に在り。猶之河を疏す者は、必ず其の源に遵ひ、枝に登る者は其の本を忘れざるがごとし。厥の由來を推せば、誠による所有り。況んや京師は首善の區爲り。名利の藪、百工相聚し、千里もて謀生す。孰か聖時の雨露に沾ひて、神靈の庇蔭を仰がざらんや。我が江南の糖餅行の如きは、京に在りて貿易すること已に久し。鋪戸の櫃案する所の人等、向に康熙年間に於いて、即ち沙窩門内道左の馬神廟に在りて、銀兩を捐助し、并せて墳地を置き、供奉香火の費と爲す。内に雷祖大帝を敬祀し、會期に屆る毎に、恭しく廟所に詣でて拈香し、以て誠恪を昭にして、靈祝の所に酬ゆ。乾隆五十五年、事を司る大興樓の火災にて、地契及び殿宇を修蓋せる帳目を將て、均な焚化せられ存する無し。後に嘉慶四年に於いて、又た續いて香資を捐し、供器饗駕等を置辦せる件は、并せて議して行規の章程有り。按ずるに舊立の碑碣は考す可きにして、茲に復た叙べず。去年行規紊亂せるに迫り、舊章を漸改し、遂に櫃夥人等に邀めて、通同して公議し、重ねて行規を立て、遵守せ俾む。庶はくは前人の與善の美に負かず、後の有爲なる者、抑ち亦た本を徵し源を求むる所有らんや。是れを序と爲す。

道光二十一年三月初四日、爐灶を修理せる錢四十四吊四百四十二文。二十二年十月初四日、齊行敬神錢三十七吊四百文。道光二十五年三月二十六日、地を置くこと三畝五分、石莊子が字様を立つ地價は共用錢一百四十三吊四百七十七文。此の地は永定門外西の彭家莊に坐落す。道光二十七年二月十九日、群牆南岸を修理せる共用二百吊文正。

京通南案。祥豐號、惠蘭齋、慶蘭齋、馨蘭齋、通州の言廷桂錢十千を助く、明遠樓、阜豐號、太和號、天桂齋、天□齋、復盛齋、豐泰號、金蘭齋、寶聲樓、乾泰號、同泰號、瑞興號、成泰號、佩蘭齋、天源號、上珍齋、王其祿、各鋪戸の掌案の人等銀三十七吊五百文を助く。

道光二十八年六月二十四日、同立す。

### ③ 語 釈

〈莫爲之前、雖美弗彰、莫爲之後、雖善弗傳〉韓愈「與於襄陽書」の「莫爲之前、雖美而不彰、莫爲之後、雖盛而不傳」にもとづいた文章と思われる。〈鋪戸〉商店。〈雷祖大帝〉九天応元雷声普化天尊。糖餅行の守護神とされていた。〈櫃夥人〉支配人。〈吊〉通貨単位。穴空き錢千文。北方では百文。〈南案〉江南出身者の菓子屋ギルド。〈掌案人〉番頭。支配人。

### ④ 和 訳

思うに、「善をなす道は、これが前となるもの莫くんば、美なりと雖も彰れず。これが後となるもの莫くんば、善なりと雖も伝わらず」といわれている。善いことを始めるにあたつては、先人をたずね、美德をつぐ責任は後輩にある。あたかも河を通す者は、必ずその源流にしたがい、枝に登る者はその幹を忘れないのと同様である。その由来を推し量れば、本当に由来があるのである。まして京師（みやこ）は善事の中心の地区であり、名利の集まるところで、もろもろの職人が集結し、千里をいとわず生計の道を図っている。誰か聖代の恩沢に潤つて、神霊の庇護を受けていないものがあるだろうか。

我が江南の糖餅行は、京師にあつて長らく商売を行つてきた。商店の店主たちは、以前康熙年間（一六六二―一七二二）に、沙窩門内道左の馬神廟に、銀両を寄付し、あわせて墓地を置き、祭祀の費用とした。境内には雷祖大帝を祀り、（祭祀の）会期がくるたびに、恭しく廟所に詣でて焼香して、誠意を示し、神霊の恩恵に感謝してきた。乾隆五五

年（一七九〇）に、事務所となつてゐる大興樓の火災で、土地の契約書と建物の修築に関する帳簿が、すべて焼失してしまつた。後の嘉慶四年（一七九九）に、また祭祀の費用を寄付し、祭祀用具や神輿などを設置した件については、協議して行内で規約を設けた。それは昔の碑文を調べれば分かるので、ここでは繰り返さない。昨年、行内の規律がいに加減になるに及んで、古い規約を少しづつ改め、ついに店の支配人などに求め、協議して、改めて規約を定め、遵守させるようにした。願わくは先人の善挙の美徳に背かず、後の有為の者には、根源を審らかにし淵源を求めてほしいものである。これを序文とする。

道光二年（一八四二）三月四日、かまどを修理するための錢四四吊四四二文。同二年一〇月四日、共同祭祀を行うための錢三七吊四〇〇文。道光五年（一八四五）三月二六日、土地を三畝五分購入し、石莊子（人名か？）が登記した地価の共用の錢一四三吊四七〇文。この土地は永定門外西の彭家莊にある。道光二十七年（一八四七）二月一日、かこいと南のがけを修築するための共用の錢二〇〇吊文ちょうどである。

京通南案。祥豊号、惠蘭齋、慶蘭齋、馨蘭齋、阜豊号、太和号、天桂齋、通州の言廷桂が錢十千を寄付した、明遠樓、天□齋、復盛齋、乾泰号、豊泰号、金蘭齋、宝声樓、瑞興号、佩蘭齋、上珍齋、同泰号、成泰号、天源号、王其祿、各々の店舗の番頭等が銀三七吊五〇〇文を寄付した。

道光二八年（一八四八）六月二四日に関係者一同で立てた。

# 【解説】

この会館碑記は、清代の北京にあつた糖餅行（菓子屋・菓子職人たちのギルド）の会館に立てられた石碑に書かれたものである。影印と録文が、前掲『明清以来北京工商会館碑刻選編』に収録されている。北京の糖餅行の拠点は、康熙年間に馬神廟（菓子業者の守護神である雷祖大帝を祀る廟）に置かれた。当初は南案や南果舗と呼ばれる江南出身の菓子

屋・菓子職人のギルドが主体であったが、後に地元の北案や満洲餠舗ほつぽうと呼ばれる北京出身の菓子屋・菓子職人のギルドも参加するようになった。

餠舗とは、満洲語に由来する言葉で、小麦粉を使ったお菓子を含む食品の総称である。満洲餠舗の具体例としては、清代の北京の歳時記である敦崇の『燕京歳時記』巻一〇、一〇月、中果・南糖の項によれば、薩齊瑪さちま（薩其馬、沙琪瑪とも書く。小麦粉を使って作ったおこしのような揚げ菓子）などがあつたようである。

なお、尾上葉子氏の各論文や前掲『明清以来北京工商会館碑刻選編』によれば、嘉慶五年（一八〇〇）から神殿の修築や規約に関する石碑が七つ立てられていることが確認できるが、ここで取り上げたのは、道光二八年（一八四八）に建物の修築をした際に立てられた石碑の文章である。

## 【書式】

前半には、今回の事業が行われることになった経緯について書かれ、後半に、どういった名目でどれだけの義捐金を得られたかが書かれ、その後に、義捐金を拠出した関係店舗や個人名が列挙されている。また、末尾に石碑を建立した年月日が書かれている。

## 【参考文献】

仁井田陞『中国の社会とギルド』（岩波書店、一九五一年）

尾上葉子「清代の北京における菓子屋ギルド及び点心舗について」『奈良史学』七号、一九八九年

尾上葉子「わたしの北京（九）清代北京の菓子屋とお菓子」『アジア遊学』四七号、二〇〇三年）

尾上葉子「糖餅行のギルドホール馬神廟と祭神」『奈良史学』二二号、二〇〇四年）

藤田益子「清代の旗人、満洲族に関わる語句について——『兒女英雄伝』からの考察——」（『新潟大学国際センター紀要』七号、二〇一一年）

## 附 清代地方志告示・禁令関係史料

### 1 風俗関連記事

#### 【解題】

地方志の風俗の項には、地域全体の気風、冠婚葬祭のあり方、歳時記、生活習慣など習俗に関する事柄が書かれている。そのなかでも生活習慣（悪習も含む）に関する記事には、碑刻資料でみてきたような官僚が出した告示や禁令に関するものが多くみられる。そこで以下ではそのような記事をいくつか紹介してみたい。

風俗の項の記事は、一般的には、編纂時以前に書かれた史書など（正史や文集など）や他の地方志から転載した記事と編纂時に新たに書き加えられた記事から構成されている。ただ、記事のなかには、いつの時期の記事なのか明確には判別しにくいものも含まれているため、具体的な時期が書かれていない記事については、書かれている状況がいつの時期のことを言っているのかということについて、他の時代の地方志の記事や関連文献の記事との比較検討なども行いながら、慎重に判断する必要がある。

#### 【史料Ⅴ】

同治『贛州府志』卷二〇、風俗「贛俗喜演戲謝神」

#### ① 原文

贛俗喜演戲謝神。無賴棍徒藉此、斂錢圖利。每假神會誕期等名色、攔街搭臺、阻礙行旅、負擔車輿、輒須遶道而行。金鼓喧闐、匪徒混雜、積弊叢生。巡道文翼、會同總鎮王永勝、督同府縣、嚴諭禁止。如居民戲班有再犯者、立提究懲。其風漸革、民皆便之。又每年以賽會敬神爲名、斂積巨貲、擡神遊街、金鼓歌吹、旗幟車馬、雜沓喧譁。遠近居民來觀、闐衢溢巷、男女混雜、藪奸滋事。雖附鄉儺之義、然傷財敗俗。有心人當思有以抑之。新增。

## ② 訓読

贛の俗は演戲謝神を喜む。無賴棍徒は此れに藉りて、錢を斂め利を圖る。毎神會誕期等の名色に假りて、街を攔り臺を搭り、行旅を阻礙し、負擔・車輿は、輒須遶道を遶りて行く。金鼓喧闐し、匪徒混雜し、積弊叢生す。巡道の文翼は、總鎮の王永勝と會同し、府縣を督同し、嚴諭して禁止す。居民・戲班の再犯有る者の如きは、立ちどころに提して究懲す。其の風漸く革り、民皆な之れを便とす。又た毎年賽會敬神を以て名と爲し、巨貲を斂積し、神を擡ぎて街に遊び、金鼓もて歌吹し、旗幟車馬もて、雜沓喧譁す。遠近の居民來りて觀て、闐衢溢巷し、男女混雜し、藪奸滋事す。鄉儺の義に附すと雖も、然れども財を傷つけ俗を敗ふ。心有るの人は當に以て之を抑へること有らんとと思ふべし。新增す。

## ③ 語釈

《棍徒》悪党。《神會誕期》神々の生誕祭。「神會」は後述の「賽會敬神」と同じ。《名色》名目。《金鼓》鐘と太鼓。《喧闐》やかましく騒ぎ立てる。《巡道》分巡道のこと。道員（布政使・按察使の属僚で、各地に派遣される官僚）の一つ。道員（道台とも言う）には、省内の一地域を管理して、その地域内の治安の維持や行政事務の監督などを行う分巡道、分守道の他に、特定の任務を担当する督糧道、塩法道、塩茶道、河工道、駅伝道、海關道、兵備道、屯田道などがあった。《文翼》湖南省長沙府湘鄉県の人。同治七年（一八六八）に分巡吉南贛寧道に任命された（同治『贛州府志』卷三四、統轄表参照）。《會同》相談などのために寄り集まる。《總鎮》鎮守総兵官のこと。総兵とも略称される。清代



の軍隊組織の一部を構成する綠營は、省ごとに設けられた「標」という編成単位の下、提督を頂点に、総兵、副将、参将、遊撃、都司、守備、千総、把総という階級が設けられており、総兵は上位から二番目の階級であった。〈王永勝〉

江蘇省江寧府六合県の人。同治七年（一八六八）に贛州府の総兵官に任命された（同治『贛州府志』卷四〇、武秩官表参照）。

〈督同〉共に監督する。〈戲班〉劇団。〈立提〉たちどころに召喚する。〈賽會敬神〉神像を廟から担ぎだし、どら

などではやしたてながら街道を練り歩く行事。〈闖衢溢巷〉「闖溢」は「満ちあふれるさま」の意。「衢巷」は「ちま

た」の意。〈鄉儺〉儺戯<sup>なぎ</sup>のこと。祭祀儀式の中で演じられる仮面舞踊である儺舞が発展して演劇になったもの。悪疫

を祓い、災いを除き、福を招くために演じられた（田仲一九八九）〔広田ほか一九九七〕。

#### ④ 和訳

贛州府の風俗では、演劇をして神に感謝する行事が好まれている。「しかし」無頼悪党がこれにかこつけて、金儲けをしている。いつも神々の生誕祭などの名目をかりて、街路をさえぎり、舞台をつくり、旅人をさまたげている。荷かつぎや車・輿は回り道せざるを得ない。「無頼悪党が」鐘や太鼓でやかましく騒ぎ立て、悪人たちが入り乱れ、長年の悪習が多発している。

分巡道の文翼は、総鎮の王永勝と相談して、知府・知県を共に監督して、厳しく論じてこれらの風習を禁止した。住民や劇団で再犯するような者は、たちどころに召喚して懲らしめる。「その結果」その気風はようやく改善して、民はみなこれをよしとした。「しかし」また、毎年神々の祭りを名目にして、多くの金銭を集め、神輿を担いで街路を練り歩く。鐘や太鼓を鳴らし歌い演奏して、旗や傘、車馬で、多くの人が混みあつて騒がしくしている。遠近の住民たちが見に来て、街に満ち溢れ、男女が入り乱れ、邪<sup>よこしま</sup>な騒動が起きている。郷儺<sup>やど</sup>という理由であるといつても、人々の財産を損ない風俗を悪くしている。心ある人々はこれを規制する手だてを考えるべきである。以上は、新しく書き加えた記事である。

## 【史料VI】

同治『贛州府志』卷二〇、風俗「贛俗愛屠牛犬」

### ① 原文

贛俗、愛屠牛犬。城廂間、有私宰。巡道文翼、會同總鎮王永勝、督同府縣、通示內外、一體嚴禁。至入城之牛、由城門員弁登號、注明投往之處、轉報保甲、委員查驗、按旬彙報。病牛倒斃者、報驗方準開剝。每觔止售錢二十四文。違者重懲。至屠犬、雖不在禁例、因其殘忍、併禁之。新增。

### ② 訓読

贛の俗、牛犬を屠るを愛む。城廂の間、私宰有り。巡道の文翼は、總鎮の王永勝と會同し、府縣を督同し、内外に通示し、一體に嚴禁す。城に入るの牛に至りては、城門の員弁由り登號し、投往せるの處を注明し、保甲に轉報し、委員して查驗し、旬に按じて彙報せしむ。病牛の倒斃せるは、報驗して方て開剝を準す。觔ごとに止だ錢二十四文にて售るのみ。違ふ者は重く懲す。犬を屠るに至りては、禁例に在らずと雖も、其の殘忍なるに因りて、併せて之を禁ず。新增す。

### ③ 語釈

〔城廂〕城門内の市街地と城門外の城門に隣接した市街地のこと。なお、城とは都市のことであり、ここでは府治（府の官庁）がある府城のこと。〔員弁〕緑營の將校と下士卒。〔注明〕はっきり注記する。〔轉報〕取り次いで知らせる。〔保甲〕民間の自衛・相互監視のための組織。〔委員〕人を派遣する。〔查驗〕調べて証拠だてる。〔彙報〕取りまとめて報告する。〔報驗〕検査のために申告する。

### ④ 和訳

贛州府の風俗では、牛犬を屠殺することを好んでいる。城内や城門外の付近では、勝手に屠殺している。分巡道の文翼は、総鎮の王永勝と相談して、府県を共に監督して、「城の」内外に通達を出し、全体的に厳禁させた。城に入った牛については、城門で緑營の將校と下士卒が登録して、送り先をはっきりと注記し、保甲に取り次いで知らせ、人を派遣して調べて証拠だて、一〇日ごとに取りまとめて報告させるようにした。病気の牛で倒れて死んだものは、検査のために申告してはじめて裁くことを許すようにした。觔（＝斤。約六〇〇グラム）ごとに売値は二四文だけとした。違反した者は重く懲罰することとした。犬を屠殺することについては、禁例にはないけれども、残忍なので併せて禁止することにした。新しく書き加えた記事である。

### 【解説】

【史料Ⅴ】【史料Ⅵ】は、清代、同治年間（一八六二―一八七四）の江西省贛州府における悪習と、それに対する分巡道と総鎮による取り締まりに関する記事である。【史料Ⅴ】は、演劇を伴う祭りで悪党が暗躍して悪事を行っている問題に関する記事である。清代には、一般的に神々の祭りの時に、廟に関係する人々が主催して、演劇を催すことが多かったが、その際に裏で悪党が暗躍して悪事を行うことが多く、社会問題となっていた。この記事を見ると、清代末期の贛州府でもこれが大きな問題となっていたことが窺える。なお、清代の蘇州府などでは官僚による取り締まりが行われたが（大谷二〇〇六）、この記事から贛州府でも分巡道と総鎮が取り締まっていたことが分かる。

【史料Ⅵ】は、牛と犬を食べる食文化に関する記事である。牛は農耕のために必要であるという観点から、牛を食べる行為はすでに唐律の厩庫律に「諸故殺官私馬牛者、徒一年半」との規定があり、宋代にも法律で禁じられていた（『宋会要輯稿』刑法・禁約参照）。清代でも、清律の兵律・廩牧・宰殺馬牛の条に「凡私宰自己馬牛者杖一百。……若故殺他人馬牛者杖七十徒一年半駝羸驢杖一百」とあり、規制されていた。しかし、現実にはしばしば食べられていたよ

うで〔塩二〇〇一〕、この記事から、清代の贛州府でも広く食べられていたことが確認できる。

また、桂小蘭氏によれば、犬は、漢代までは広く食べられていたが、狩猟犬・番犬として犬が必要であるとの観点から、犬を食べない北方民族の影響が強まると、南北朝時代以降、タブー視されるようになったとされる。しかし、南北朝時代以降も広東では食べられていたと述べている。この記事から、清代には広東に隣接する江西省の贛州府でも広く食べられていたことが確認できる。犬食は法律で禁じられていたわけではないが、一般的にタブー視されていたので、官僚たちは禁止すべき対象であると認識したものと思われる。

## 【書式】

地方志の風俗の項の記事は、先述のように、その地域に関する今までの史書や地方志などの記述の転載記事と、新たに編纂時に書き加えられた記事から構成されていることが多い。通常、転載記事の場合は史料の末尾に出典が書かれており、新たに編纂時に書き加えられた記事の場合は、上記の史料では「新増」とあるが、文末には何も書かれな  
ることが多い。

## 【参考文献】

- 田仲一成『中国郷村祭祀研究』（東京大学出版会、一九八九年）  
広田律子ほか『中国漢民族の仮面劇——江西省の仮面劇を追って——』（木耳社、一九九七年）  
塩卓悟『宋代牛肉食考』（『中国——社会と文化——』一六号、二〇〇一年）  
桂小蘭『中国古代の犬文化』（大阪大学出版会、二〇〇五年）  
大谷敏夫『清代蘇州における行政と風俗——淫祠・賭博に関して——』（『アジア文化学科年報（追手門学院大学）』九号、二

〇〇六年、のち大谷敏夫『清代の政治と思想』朋友書店、二〇一六年所収）

## 2 告示文

### 【解題】

地方志には、しばしば官僚が出した告示文や禁令の記事も掲載されている。省の官僚が出したものの一部（特に重要なもの）は各省の省例（行政上の先例をまとめた書物。例えば『福建省例』など。「寺田一九九三 参照」で確認できるが、地方志に掲載されている場合もある。府・県の地方官が出したものの一部は、地方志の藝文志に掲載されることが多いが、風俗の項など各関連項目に付随する形で掲載されている場合もある。それ以外に、官僚の文集などでも確認できる。

### 【史料Ⅶ】

同治『広信府志』卷二之二、建置、育嬰堂「康熙四十六年巡撫郎廷極禁溺女檄」

#### ① 原文

天道好生、聖人惡殺。故民物皆歸於胞與、而子女無間於孝慈。本部院蒞任以來、訪聞、江右有溺女故習、最爲殘忍。或謂、生女乏資遣嫁。或謂、溺死易於生男。愚昧無知、恬不爲怪。試思、狼如狼虎、尙不忍食其子。豈有爲人父母、而反白溺其女。則其存心慘毒、豈不甚於虎狼。夫得子之遲速、自有定數。並不因育女而悞其生子。至於遣嫁之厚薄、原可稱家之有無。與其忍心害理、置之慘死於須臾、何如幫布荆釵、令得全生而得所。況乎殺機相感、或招水旱災荒、亦且冤報無差、必至貧窮天札。且自古以來、有得孝女而代父抵刑。有因女貴而門閭光顯。曹娥能抱屍出水。木蘭曾負戟

從軍。略舉二三餘難悉數。嗟、此溺女何負於親而忍加茲戕賊乎。云云。嗣後、凡有生女者、務須回心撫育、不得仍前溺死有傷天性。倘果真正赤貧之家不能撫養者、許鄰佑報明地方。官送入育嬰堂撫養、聽官紳善姓捐資、乳哺以保生成。如有不遵仍前戕溺者、將父母坐以故殺子孫之條。鄰佑地方不舉一體責治。

## ② 訓 誡

天道は生を好み、聖人は殺を惡む。故に民物は皆な胞與に歸し、而して子女は孝慈に間無し。本部院蒞任して以來、訪聞すらく、江右に溺女の故習有りて、最も殘忍爲り。或いは謂ふ、女を生めば嫁を遣るに資するに乏し、と。或いは謂ふ、溺死せば男を生むに易し、と。愚昧無知、恬として怪と爲さず。試みに思へ、狼なること狼虎の如きも、尙ほ其の子を食ふに忍びず。豈に人の父母爲りて、反って白其の女を溺すること有らんや。則ち其の心に慘毒を存すること、豈に虎狼より甚だしからざらんや。夫れ子を得るの遲速は、自ら定數あり。並びに女を育てるに因りて其の子を生むを悞らさず。嫁に遣るの厚薄に至りては、原より家の有無を稱すべし。其の忍心もて理を害し、置きて之を須臾に慘死せしむるよりは、何ぞ幫（＝裙）布荆釵もて、生を全うして所を得せしむるに如かんや。況んや殺機相感せば、或いは水旱災荒を招き、亦た且つ冤報差無く、必ずや貧窮天札に至る。且つ古より以來、孝女を得て父に代わりて刑に抵ること有り。女の貴きに因りて、門閭光顯すること有り。曹娥は能く屍を抱へて水より出づ。木蘭は曾て戟を負ひて軍に従ふ。二三を略舉するも餘は數を悉し難し。嗟、此の溺女は何ぞ親に負きて忍にも茲れに戕賊を加ふるや。云々。嗣後、凡そ女を生む者有らば、務めて須く回心して撫育すべし、仍前溺死させ、天性を傷つけること有るを得ず。倘し果たして真正なる赤貧の家で撫養能はざる者は、鄰佑の地方に報明するを許す。官は育嬰堂に送入して撫養し、官紳善姓の捐資し、乳哺して以て生成を保たんことを聽す。如し遵はずして仍前戕溺する者あらば、父母を將て坐するに故殺子孫の條を以てす。鄰佑・地方の擧げざるは一體に責治す。

## ③ 語 釈

《本部院》巡撫の自称。《江右》江西のこと。右には西という意味がある。《幫布荊釵》「荊釵布裙」（いばらのかんざしと木綿のもすそ）。後漢時代の梁頌の妻孟光の故事（晋の皇甫謐の『列女伝』など）に由来する言葉で、粗末な服装のことを象徴した言葉。《曹娥》後漢時代の孝女で、『後漢書』列女伝には、父の曹<sup>そう</sup>盱が洪水で溺れ死に、遺体が発見できなかったので、一七日間泣きつづけ、ついにその川に身を投げたと書かれている。なお、柴田昇氏によれば、その後、民間説話で、父の屍を抱えて浮かび上がったという説話が付け加えられたとされる。《木蘭》古代楽府・木蘭辞（木蘭詩）に描かれている伝説の孝女で、老病の父親に代わり、男装して従軍し、軍功を立てて故郷に帰還したとされている。《育嬰堂》嬰兒救済施設。《故殺子孫之條》故殺子孫律のこと。清律の刑律・鬪毆「毆祖父母父母」の条には「其子孫違犯教令而祖父母父母非理毆殺者杖一百。故殺者杖六十、徒一年」とある。《地方》村役人。保甲の組織の長のこと。《責治》処罰する。

## ④ 和訳

天道は生を好み、聖人は殺すことを憎む。ゆえに人民は皆同類であり、息子と娘に親に孝を尽くし、子弟をいつくしむことにおける隔たりはない。本官が着任して以来、江西には溺女（女兒の間引き）の習俗があり、最も残忍であると聞いている。ある人は娘を産むと嫁にやる持参財産がないといっている。ある人は女兒を溺死させれば息子が産みやすくなるといっている。「彼らは」愚かで無知でそのことをおかしいとは思わない。

考えてもみたまえ、狼や虎のような残忍な生き物であっても、自分の子を食べることはしないものである。まして人の父母であって、自分の娘を溺れさせるというのであれば、心にむごたらしさを抱えていることは、どうして虎や狼よりひどくないといえようか。そもそも息子を得ることが早いか遅いかは、自ずから決まっていることである。けして娘を育てたからその息子を産むのが遅れているわけではない。持参財産の多寡については、もともと家にそれがあるかどうかで決めるべきである。「しかし」無慈悲にも道理を害し、あつというまに娘をむごたらしく死なせるより



は、たとえ質素な衣装であっても、命を全うさせ、ふさわしい居場所を得る方がよいのではないだろうか。まして殺意が互いに感じあえば、日照りや水害を招き、また、さらにむくいひがひっきりなしに来て、必ず貧困や早死を招く。古来、孝行娘を得て、父親の代わりに刑罰に服したことがあり、娘が高貴になることで、一門が繁栄することがある。曹娥は父の屍を抱いて水から出た。木蘭はかつてほこを背負い従軍した。二・三をあげるが同じような例は枚挙にいとまがない。ああこの溺女はどうして親に背いてもいないのに、残忍にも害を加えられるのか。云々。

以後、すべて娘を産んだ者がいたならば、つとめて必ず心を入れかえて養育して、以前のように溺死させ、天性を傷つけるようにしてはいけない。もし本当に貧しい家で養育ができない者は、近隣の者が村役人に申告するのを許す。官は育嬰堂（嬰兒救済施設）に送って養育させ、郷紳や慈善家が寄付し、乳を与えて養育させるようにすることを認める。もしこれに従わず、以前のように溺死させる者がいたならば、その父母は「故意に子孫を殺害したことに關する条文」により処罰し、近隣や村役人がそれを告発しない場合は全員処罰する。

### 【解説】

康熙四十六年（一七〇七）に江西巡撫（巡撫とは省の長官のこと）の郎廷極（二六六三―一七一五）が出した溺女を禁じた檄文（布告）である。郎廷極は、字は紫衡、号は北軒、八旗の漢軍鑲黃旗に属していた。

宋代以降、江西や福建などでは、溺女が社会問題化しており、しばしば地方官により禁令が出されていたが、これもその一つである。この史料では、溺女の背景には、結婚時に多額の粧奩（しやうれん）（持参財産）が必要ことや娘を生むと息子を産むのが遅くなるという迷信があることが指摘されている。

特に贅沢な結婚（粧奩の多さ）は当時社会問題となっていて、他の告示文でもしばしば指摘されている。郎廷極は、こうした状況に対して、曹娥や木蘭の故事も引用しつつ、娘も親のためになることなどを説き、溺女をしないように



説得している。木蘭の故事の引用は、他の地方官の告示でも見られ、清代に定式化してゆく説得の仕方である。

また、具体的な措置としては、全国的に設けられた育嬰堂の活用や従わない者を「故殺子孫律」で罰することが書かれている。これらの措置は、他の地方官の告示でもしばしば書かれていることである。なお、溺女と関連する告示に関する研究・史料については、「小川二〇一四」参照。

### 【書式】

冒頭では地方官自身が把握した溺女とその背景などの実情が述べられ、その後、故事などを引用しながら、説論をする文章が続いている。そして最後に、法律なども適用した具体的な措置が書かれている。

### 【参考文献】

寺田浩明「清代の省例」(滋賀秀三編『中国法制史——基本資料の研究——』東京大学出版会、一九九三年所収)

夫馬進『中国善会善堂史研究』(同朋舎出版、一九九七年)

柴田昇「曹娥と「孝」——後漢時代の「孝」に関する断章——」(『愛知江南短期大学紀要』四一号、二〇一二年)

小川快之「清代江西・福建における「溺女」習俗と法について——「厚嫁」「童養媳」等の習俗との関係をめぐって

——」(山本英史編『中国近世の規範と秩序』公益財団法人東洋文庫／研文出版、二〇一四年所収)

前村佳幸「康熙二二年刊『弋陽県志』における風俗論——「鬻妻」と「溺女」——」(『琉球大学教育学部紀要』八六号、二〇一五年)

